

杉原千^{ち うね}畝とリトアニア事件

はじめに

2005年の夏は、自分の関心領域と言ってよいヨーロッパの北、バルト海沿岸で、未だ訪れたことのない東南岸のバルト三国を訪れた。この地域は、旧ソ連時代、「ソヴィエト連邦の中の西欧」とでも呼ぶ、垢抜けたスマートな所として知られていた。当時訪れてみたかったが、その機会を逸していた。ところで、バルト三国でもリトアニアには特別な関心があった。その一つが先の大戦中、当時の首都カウナスにおいて日本の領事代理の杉原千畝氏が、追われるユダヤ難民に日本通過のヴィザを与えた、いわゆる「リトアニア事件」である。

94年に公開された映画『シンドラーのリスト』（S.スピルバーグ監督）で、ポーランド南部クラコフ市のユダヤ系住民が多数、オスカー＝シンドラーというドイツ人実業家によってナチスの暴虐を免れ、命を救われたことを知った。この頃から、「日本人に当時、もう一人のシンドラーがいた」と言われるようになった。その人が他ならぬ杉原千畝氏である。杉原氏のことは遅まきながら、今回のバルト行き航空機（スカンジナビア航空）に持ち込んだ一冊の本を読んでよく知ることとなった。下山二郎氏の著、『ホロコースト前夜の脱出 / 杉原千畝の命のビザ』である。本業は埼玉県の中学校教員だという下山氏の本は、分りやすくよくまとまっていて、コペンハーゲンのカストルップ空港に到着する前に一気に読んでしまった。これをきっかけに旅の後半、そのリトアニアの事件の舞台であるカウナスを、必ず訪問しようと思うようになった。そしてさらに杉原氏（以下、敬称略）のことを、より詳しく知りたいと思

うようになって行った。

リトアニアへの旅

今回の旅では、SASのハブ空港であるコペンハーゲンで一泊し、翌日バルト航空の短距離ジェットで三国の一つエストニアに向かった。その日中に、北欧的な雰囲気のある首都のタリンに入った。そこからは長距離バスを使ってバルト海沿岸を南下した。この地域を南北にわけるダウガヴァ川の港市でもあったラトビアのリーガに着く。タリンとリーガは沿岸に位置し、中世に「ハンザ同盟」に加わっていたこともあり、ドイツ文化の色濃い地域である。私には多少なじみのある世界だった。



写真1 ラトビアのリーガの広場

旅の6日目に、リーガからそのダウガヴァ川を越えて内陸部へと入る。ラトビアでは幹線道路の拡充が遅れていて、至る所で改修工事中だった。バスは一向に速度を上げない。ところが、リトアニアとの国境を越えると道はまるでアメリカの高速道路、「インター・ステート」のように広々と快適なそれに変わり、麦や牧草の刈り取りが終った農地が続く道をバスは快適に飛ばした。海岸部から離れたこともあり、何か空気が違う。リトアニア

はバルト三国の中で、他の二国と明らかに違うものを持っていると感じた。歴史的に見ても二国がドイツ文化の影響を受けたのに対し、こちらは中世においてポーランドと君主を同じくする道を歩んだ。また16世紀前半、北ドイツに発したマルティン＝ルターによる宗教改革の波も、この地には及ばなかった。二国が福音主義ルター派のプロテスタントの国であるのに対し、リトアニアはカトリックの国である。午後遅くの便だったので、リトアニアの現在の首都ヴィルニウスに着いたのは、夜も8時過ぎだった。それでも白夜の名残で、目星をつけた駅近くのホテルに入るのに、道を失うことなくたどり着くことができた。



写真2 ヴィルニウス大聖堂と鐘楼

翌日はほぼ一日、市中の街歩きに当てた。ヴィルニウスは市内のやや北寄りや蛇行するネリス川が東西に還流し、その流れに囲まれた緩やかな丘が数多の坂道を擁している。地形としては変化に富んだ、緑に囲まれた小都市である。中心部には、この街の重層的な歴史を物語るカトリック教、ロシア正教、ユダヤ教の会堂（シナゴグ）や、カトリックの修道会「イエズス会」が経営するヴィルニウス大学の校舎などが点在している。改修中のものもあるが保存の良い建物も多く、それらは南欧的な明るい色彩の外壁に覆われ、デザインもバロック様式でリーガまでに見て

きたゴシック風の建物とは趣きを異にしていた。街は規模が小さい分だけ歩きやすく、散策は楽しく興味つきないものとなった。

午後に訪れたのは「グリーン・ハウス」と呼ばれる国立ユダヤ博物館の別館で、ここには先の大戦中、リトアニアのユダヤ人に降りかかったホロコースト（大量虐殺）の悲劇が様々な資料とともに説明されていた。そしてこのヴィルニウスが、ユダヤ文化に深い歴史を刻んだ街であることが確認できた。この街はかつて「リトアニアの（或いは北方の）エルサレム」と呼ばれたほど、中東欧地域で屈指のユダヤ人居住地（ゲットー）をもつ、イディッシュ語（※1）文化の中心地だった。博物館の帰り道に、そのユダヤ人ゲットーの跡を訪ねた。ユダヤ人が住んでいた痕跡は、入り組んだ街路の佇まいやこの街が生んだユダヤの学者「ヴィルナのガオン」のレリーフと銘板などに残っていた。しかし現在は、肝心のユダヤ教徒は殆どいないという。大戦を機に居住していたユダヤ人はホロコーストにあうか、逃亡し離散したのだという。杉原が助けた人々とこれらユダヤ系リトアニア人の関係はどうだったのか。これは後章に譲ることにする。

リトアニア滞在の三日目、午前はこの国がソ連から独立する時に起きたソ連特殊部隊による「テレビ塔占拠事件」の現場を訪ねた。そのテレビ塔がある市西郊の国営放送局の場所に、トラム（市電）に乗って出かけた。リトアニアは1990年、ソ連の支配を脱して独立している。その時に市民に犠牲が出たのがこの場所だった。その記念の地を後に再びトラムで駅まで戻り、ちょうど正午の列車でカウナスに向かった。リトアニア国鉄で1時間半の旅である。

カウナスはヴィルニウスのネリス川とその南を流れるネマン川が西方で合流する位

置にある、この国第二の都市である。一次大戦と二次大戦の戦間期（1918年～39年）、この街にリトアニアの首都が置かれていた。駅から市の中心まではバスに乗らねばならぬ距離である。予定は一泊だったので、すぐに宿を確保することにした。市の目抜き通りで歩行者天国になっているライスヴェス通りを北に入ると、「メトロポリス・ホテル」がある。ここに狙いを定めたのは、領事代理の杉原とその家族がリトアニアに着任した1939年の9月と、リトアニアを後にした40

写真3 メトロポリス・ホテル



年9月の二度、領事館を構えぬ時に宿としたそのホテルだからだった。部屋は幸い空いていた。戦後久しく国営ホテルだったが、建物と設備はそのままで老朽化は否めなかった。ただ一つ、正面階段の踊り場にある大型窓にはめられたステンド・グラスだけが、美しく輝いていた。フロントの女性は、朝食も用意できないので食べたい人は近くの格上のホテルに出向いてくれと言う。ここがその、「タキオイ＝ネリス・ホテル」の経営だと、後で知った。

少しばかりの午睡の後、満を持したように徒歩で東の丘上にある旧領事館（現杉原記念館）をめざした。この街も東西の文化が行き交った場所なのか、市中にシナゴークもあればトルコ系のイスラム寺院も残っていた。地図を頼りにそのトルコ寺院の立つ公園の敷地を抜けると、丘に登る急な階段が見えてきた。それを降りてきた初老の婦人に、「ザウ

エイ トゥー センポ＝スギハラ？」と尋ねてみた。リトアニアで杉原はセンポ＝スギハラと自称していたからだ。彼女は、「ダー」とロシア語で答えた。この国を最近まで支配していたロシア系の人だったのかどうか、それは分らなかったが、思わず「スパーヴァ（ありがとう）」と答えてしまった。

丘に登り、高台の道にある案内板を見ていくと、大きな館の多い住宅街の一角ヴァイツガント通り13番地に、その領事館だった建物が健在だった。外階段を中二階に上る。表札代わりに看板にはこの国のいにしえの英雄「ヴィタウタス大公」の名を冠したカウナス大学日本研究センターの名があった。呼び鈴を繰り返し鳴らしても埒があかない。しばらくして諦め北側の1階に回り込むと、気が抜けてしまった。杉原記念館の看板がこちらに掲げてあり、中には常勤のスタッフがいて出迎えてくれた。

ヴィザ発給というリトアニア事件

この建物を借り上げて杉原が日本領事館としたのは、1939年10月のことである。前月にはヒトラーのナチス＝ドイツが第二次世界大戦を開始し、手始めに隣国ポーランドに怒涛のごとく侵攻した。時は風雲急を告げていた。同行する日本人書記官もなく、一家だけでの赴任だった。現地採用の給仕ボリスラフの他に秘書兼運転手を雇ったが、その名をヴォルフガング＝グッチェと言いドイツ系のリトアニア人だった。彼がナチスの特高（特別高等警察）に当たるゲシュタポの一員であることは、その後わかって行く。それからの一年間、在留邦人が一人もいないこの国で、杉原は何をしていたのか。それは、すでに戦争に突入したドイツとこれと手を結んだソ連がいつその提携を解消し独ソ戦へと突入するのか、その情勢をさぐるというもの

だった。彼が領事を名乗らず、領事代理と称したのもそれと関係があった。グッチェはその監視役ということになる。

杉原は、前任地のヘルシンキで自動車運転免許を取得していた。彼にはお抱えの運転手がついたが自分で運転するのが好み、しばしば単独で郊外に出かけたという。リトアニア西部はドイツの東プロイセンと接している。こうした地域に出かけては、ドイツ軍の集積

状況を調べていたのだ。途中見かけた軍用車両の数をさりげなく数え上げたりすることが、情勢把握に欠かせなかったという。さらに 40 年春、この領事館にポーランド人が二人やって来た。ドイツ軍の侵攻以来、亡命政府となってしまったポーランドの陸軍情報将校、ジョルジュ＝クンツェヴィッチとヤン＝ダユケヴィッチ（通称ペシュ）である。日露戦争の勝利以来、共にロシアと対峙する国として日本とポーランドは対ソ防諜という点で協力してきた。彼らは日本政府からヴィザ発給などの支援を受ける代わりに、スパイとして杉原の目となり耳となって活動することになった。



写真 4 杉原記念館（旧領事館）

さて、40 年に入るとバルトの情勢は一段と険しくなってきた。ソ連による三国併合が迫ってきたからだ。そして 6 月、中立を約束されていたはずのリトアニアでもソ連の圧力で政権が倒れ、大統領スメトナはドイツに

亡命した。代わってリトアニア出身の数少ない共産党員の一人パレツキスを首班とする、ソ連の傀儡政権が誕生した。この事態はリトアニアに滞留していたポーランドからの、主にユダヤ系の難民にとって、切迫した状況を作り出した。

7 月 18 日木曜日朝。普段は静かなヴァイツガント通りも、この日は異様なざわめきに包まれていた。領事館前に大勢のユダヤ系ポーランド人が集まってきたのだ。中には幼い子供を抱えた女性の姿もあった。窓越しに彼らを眺めた杉原は、「来るものが来た」と受けとめたという。外交官としてつき会った在カウナスのオランダ名誉領事、ヤン＝ツヴァルテンディクが、彼らに「オランダ領キュラソー島行きの証明（キュラソー・ヴィザ）」を発行したと聞いていたのだ。彼らがかつては資産を持っていたらしく、よれよれのコートなど身なりはみすぼらしかったが、その眼鏡などけっして安物ではなかった。共に眺めていた幸子夫人には、難民の不安そうな目が忘れられないものだったという。

杉原は騒ぎとならぬよう一人外へ出て、彼らに呼びかけた。取りあえず代表を五人だけ領事館の中に入れてと言った。玄関脇の応接間に入ったのはいずれも男性で、その中で首都ワルシャワで弁護士をしていたというゾラフ＝ヴァルハフティクが要件を説明した。

私たちはドイツ軍に占領されたポーランド西部及びソ連に占領された東部の各地から、この国に流れ込んだユダヤ系難民です。その多くが、両国による占領で命を脅かされると感じ、リトアニアのヴィルニユスに流れ込みました。ヴィルニユスはこれまでポーランド領でしたが、ソ連がこの街とその周辺をリトアニアに返還すると宣言し、リトアニアは両国の占領を受けな

い中立国となりました。私たちは一時的な寄留を許されたのです。しかし今、ソ連は再びこの国を自国の支配下に置き、私たち外国籍のユダヤ系ポーランド難民は、その地位を危うくされています。摘発されれば、シベリアへの強制移送が待っています。またここで隠れて暮らしても、いつナチス＝ドイツの魔の手が襲って来るとも恐れられません。ここを脱出して安全な場所へ行きたいのです、と。

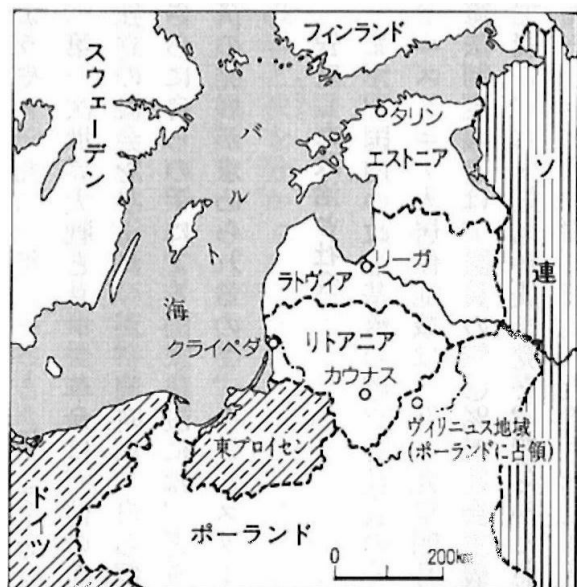
この数ヶ月、難民はパレスティナ（現在のイスラエル）やアメリカへのヴィザ発給を求め、それを得て旅立って行きました。そして今私たちが残されたのです。私たちに同情的なオランダのツヴァルテンディク領事との話し合いの中で、南米大陸の北側の島々、オランダ領スリナムとキュラソー島にはヴィザなしで渡航が可能であると知りました。ならば、そこへ達する通過ヴィザがあれば脱出できるのです。リトアニア国籍をもたない私たちは、…と。

日本の領事規則では、最終受入国のヴィザを持たぬものに通過ヴィザの発行は出来ぬという規定があった。はたしてキュラソーからのヴィザ発給なしに、日本通過ヴィザを発行できるのか。杉原は本省に渡航規則緩和を旨とする電報を打った。リーガの大鷹正次郎ラトビア公使にも照会した。しかし、本省からの連絡は、原則発給不可という返事だった。この間、在カウナスのソ連総領事と杉原は会っている。杉原が専門とするのはロシア語で、総領事とは何不自由なく意思疎通ができた。総領事は日本国が通過ヴィザを出すなら、ソ連通過を認め、自国の通過ヴィザを出すと言った。

杉原は懊悩した。難民に通過ヴィザを与えるべきか否かと。それは数日間、夜も寝つかれない緊張と葛藤を彼に与えた。彼らがオラ

ンダ領事から発給してもらったという「キュラソー行きにはヴィザなしで」という証明（キュラソー・ヴィザ）は、これをもって最終国の受け入れヴィザとは到底言えなかった。松岡洋右外務大臣からも、ユダヤ人へのヴィザ発給は他の外国人と同様の扱いでとする電報が届いていた。一方、ソ連政府は併合するバルト三国の外国公館に退去を命じており、8月末の退去期限は刻一刻と迫って来ていた。杉原夫人の幸子は、夫が一時「ここを振り切って国外へ出てしまえばいい」と話すのを聞き、「これだけの人を置いて、私たちだけで逃げるなんて絶対にできません」と返したという。

図1 戦間期のバルト三国



考えあぐねた末、杉原が出した結論は、人道上の理由からキュラソー・ヴィザの所有者に日本通過ヴィザを与えるというものだった。一週間たった7月25日木曜日朝、杉原はついに決断した。この日から通過ヴィザの発給を開始したのである。杉原は後に、その手記に書いている。難民達は、「正に夢にも見たであろう、日本領事から日本通過のビザを受け、やっと再生の思いで満面を嬉し涙で濡らしつつ、自由の諸国に向け散っていった」と。

ヴィザの発給が始められた。そして、7月29日からは毎日百枚を越えるヴィザの発給となった。それは8月に入ってからも続いた。毎日、ユダヤ人の行列がヴァイツガント通りを北に向けて伸びていた。私が登りきった丘上の階段を下るあたりまで、百数十mもの列が続くこともあったという。しかも一日では自分の順番が来ず、三日も列に並んだ人もいたという。

杉原は、8月26日の業務停止までに、実に2139枚もの通過ヴィザを発行した。どうせ一緒に行くならと、家族には1枚の発給を行い、併せて6000人以上に及ぶユダヤ人と少数のポーランド人に、日本への渡航の権利を与えたという。

8月末ともなると期限が迫って来たこともあり、杉原は殆ど昼抜きで早朝から夜までかけて手書きのヴィザ発給業務を続けた。時々万年筆のインクがにじみ仕事を妨げたが、その身も心もとうに限界に来ていた。26日について領事館を閉鎖し、館員と家族に荷造りを指示し、自らは機密扱いの書類を少しずつ暖炉で燃やし始めた。しかし、すぐにベルリンへの出国は肩が痛くて難しかった。そこで、あのメトロポリス・ホテルに移って数日の休養を取ることにした。28日のことである。それでも主のいなくなった領事館の扉には、「連絡先。S.ダウカント通り21番地。メトロポリス・ホテル。」と張り紙をしておいた。多分そのためだろう、廊下に赤じゅうたんが敷かれたあのホテルの一室を訪ねて、9月初めの出発までのひと時、もうヴィザというより渡航証明といった類の書類でも良いからくださいというユダヤ人が、時折訪れた。彼らの求めに応じ杉原は再びペンを走らせた。

9月5日、杉原一家はカウナス駅からヴィルニウス、ワルシャワ経由の寝台列車でベルリンへと旅立った。高い天井の駅舎本館に入

り待合室でその出発を待っていると、どこからともなくまたユダヤ人が現れ、渡航証明をくださいと言う。それに嫌な顔もせず杉原はペンをとった。そして出発の時、列車に乗り込んでもなお杉原は、ペンを走らせたという。列車が走り出してもこれまでという時、「許してください。私にはもう書けない。皆様のご無事を祈っています」と苦しそうに告げると、ホームにいたユダヤ人たちが深々と頭を下げたという。その時、列車を追い走り寄ってきた青年が叫んだ言葉が杉原の耳にも届いた。「スギハァラ。私たちは決してあなたを忘れません・・・!」。それは駅を出てまもなくして入るトンネル、あの領事館の丘の下をくぐるトンネルに入るまで響いたという・・・。



写真5 カウナス駅の駅舎とホーム

ところで、ユダヤ人を目の敵にするナチスの、その従順な要員であるゲシュタポのグッチェが、なぜ杉原によるユダヤ人救出を見逃し助けたのだろう。これはヴァルハフティクの証言に詳しい。ヴィザ発給の期間、グッチェは彼らの中で杉原の発行業務を手伝ったユダヤ人モイシェ=ズープニクと仲良くなったという。グッチェから漏れたのは、「俺はナチスでヒトラーを崇拝しているが、反ユダヤではない」という言葉だった。実際、館員としてのグッチェは、ユダヤ人のためのヴィザ発行業務に、献身的でさえあったという。

しかし、それを理解するのはさほど難しくないように思う。これより三年前の 1937 年、ところは中華民国の首都南京に、ジョン＝ラーベというドイツ人がいた。彼はこの年暮れから翌 38 年正月にかけて、南京に突入した日本軍の蛮行から中国の市民を守った人物として知られている。彼もまた親ナチでヒトラーの崇拜者だった。それでも、目前で繰り広げられる日本兵士の野蛮な虐殺と陵辱には、人間として耐えがたかった。グッチェの場合も、たとえゲシュタポであっても組織の拘束からある程度離れた所では、人間の取る行動には様々な形があり得た、その例だと言える。

リトアニアからの旅

明るい午後の光が、領事館だった建物の窓辺に差し込んでいた。応接間には杉原が使っていたものと同じ時代のタイプライターが置いてあった。そして領事の大きな顔写真も壁にかけてあった。玄関の脇に当たる横幅の広い窓は、ユダヤ人の行列がヴィザを求めて並んだそのカウンター役目を果たしていたという。この部屋で、発給したヴィザを窓越しに渡していたのだ。建物の奥には、ビデオ＝ブースがあり、ここで館員のアレクサンドル君が杉原の業績を紹介した作品を見せてくれた。そこで知ったのだ。杉原が岐阜の小さな町、八百津の出身であることを。そして、八百津には既に、彼を顕彰した記念館が建っていることを。日本の素朴な田園風景が広がるその町の映像がスクリーンに映し出された時、そこから遠く離れたここリトアニアにいる自分が何か不思議な気持ちになったものである。

この時の私の旅は、翌日にはカウナスの駅を出て、ほぼ一日の行程でポーランドのワルシャワを旨すものだった。残念ながら、杉

原一家がたどったルートでは途中ベラルーシに入るため、その「通過ヴィザ」が必要で、手続きをしていない私は、直接カウナスからポーランドへ入るルートを選ぶしかなかった。そのポーランドの平原を列車でひた走り夜の帳が下りたワルシャワの街が見え出した時、出迎えてくれたのは、中央駅に隣接する「文化科学宮殿」という建物のライトアップされた姿だった。この街ではやはり大戦の最中、ユダヤ人が閉じ込められたあの大ゲットーと小ゲットーの跡を、時間をかけて歩いたりした。一昨年に本校の視聴覚教室で上映した映画、『戦場のピアニスト』の舞台である。その他ショパンの心臓が壁に埋め込まれているという、「聖十字架教会」のミサにも会堂の脇に立って参列した。充実した 8 月末の三日間だった。それから、ワルシャワ・オケンチェ空港からコペンハーゲン経由で日本に戻る行程をたどった。



写真6 八百津の古い町並み

日本に帰ってからの私は、杉原に関する本を何冊か読みながら、段々と杉原ファンになって行った。意外なことがわかって来た。彼は大战期に、ヘルシンキ、カウナス、プラハ、ケーニヒスベルクそしてルーマニアのブカレストと、ユーラシア大陸の西側、中東欧に任地をもった職業外交官だった。しかし彼のキャリアには、これ以前の経歴があった。それはこの大陸の東側、ソ連のシベリアと国境を接する中国東北部での、やはり外交官とし

ての経験である。彼の青春は黒龍江省のハルピンにあった。それを知って俄然興味が湧いてきた。というのは、偶然にもこの北の都ハルピンを、私はその前年の 2004 年夏に訪れていたからだ。

ところでそのハルピンでの杉原を追う前に、まずは彼の生い立ちを知ろうと思う。

故郷八百津を訪ねる

杉原の故郷は、岐阜県加茂郡八百津町である。そこは木曾川の流れが美濃の山地をゆっくりと貫流するところだ。彼の父は地元が多い岩井姓だったが、19 世紀末の日清戦争に従軍後、その時世話になった上官の杉原好水氏の姓に変えたという。農家の出身で当時は税務署員だった。母やつはやはり旧姓岩井で、この地の藩主につながる名家の出だった。千畝は五人兄弟の二番目として、偶然にも 1900 年 1 月 1 日に生まれた。彼の生涯はまさに 20 世紀の歴史とともにある。

7 歳までをこの地で過ごした後、父の転勤で三重の桑名や名古屋などを転々とした。10 年に日本が朝鮮を併合すると、好水は植民地官吏としてソウルに赴く。千畝は愛知県立第五中学校(現瑞陵高校)での学業を続けた。17 年に卒業後、父の勧めるソウルの京城医学専門学校を受験するが白紙答案を出す。千畝は医者ではなく英語教師になりたかったのだ。父の衝撃は大きく、千畝は翌 18 年春、勘当同然に単身東京に出た。そして早稲田大学高等師範部英語科に入学する。親の仕送りもなくアルバイトでしのぐが、翌 19 年には相当苦しい生活となった。たまたま大学図書館で見た官報に「外務省留学生試験」の知らせを見て、担当官の勧めでロシア語枠で受験し合格した。こうして外交官千畝の道が開けるのである。

今年正月 5 日、リトアニアで知ったその八

百津を訪ねた。中央本線を長野の塩尻で乗り継ぎ、岐阜県に入って間もなくの多治見の駅で降りた。そこでレンタカーを借りて美濃の丘陵地を北上し、雪の残る山道を抜けてこの町へと入った。町の中心には、古い佇まいを残した町並みが一部残っていた。町には杉原を称えた「人道の丘」が整備されており、その記念館を訪れるのが主な目的だった。先立って訪ねた役場の産業振興課では、杉原の縁でイスラエル人のロテム(Rotem,P.A.)という女性が応対してくれた。彼女はテルアビブの大学日本語科の出という、日本びいきだった。彼女の母はスペイン出身のセファラディーだが、父親はポーランド出身のアシュケナージ(※2)だったという。その生まれは、ワルシャワの南西百キロにあるウッジで、やはり大戦の時、難民となった経験があるそうだ。彼女は今、時々日本を訪問するリトアニアからの訪問団や世界に散らばっているユダヤ人の来訪者の応対に当たっていると聞いた。



写真7 八百津町職員のロテム嬢

町の東側、木曾川の上流方向に、「人道の丘」はあった。丘の頂上近くには、杉原を記念したモニュメントがあり、それをセラミックでできたパイプオルガンのパイプが囲むように並んで立っていた。それと道路を挟んだ反対側にコンクリート(一部木)造の、日本の「杉原記念館」が立っていた。ここでの展示は、これまで読んだりして知った杉原に

についての知識の復習と言ってよいものだった。目新しいものと言えば、モスクワに暮らした晩年の杉原が、当時のフジテレビの特派員に語って聞かせた「リトアニア事件」のあらましについて、そのインタビューでの肉声が聞けたことだった。その他、参考資料として、イスラエル外務省発行の杉原らについてのパンフレットに目を通せたくらいだった。

役場近くまで戻って来て改めて眺めると、町は低山に囲まれ、木曾川の狭い河岸段丘上にある。それは島根県の山間の町、津和野を思い出させた。

津和野は明治の文豪で国際人でもあった森鷗外の出生地である。かつてその町を訪ねた時、私にはその狭さが印象に残った。そしてこの町でも、何か風景に圧迫感を覚えた。千畝は鷗外と同様、この狭い土地を脱して広い世界に雄飛したい。そう思って英語を学んだのではと想像をめぐらせた。

夕刻には、雪が舞う八百津を去って、高山本線的美濃加茂で車から列車に交替し、その晩は京都まで達して、宿をとった。

ハルピンでの千畝

再び千畝の足跡を追おう。杉原が留学生試験に合格した19年10月、彼は中国東北部、黒龍江省の省都ハルピンへと旅立った。本来ならばモスクワかサンクト・ペテルブルクへに行くが、当時日本はソ連を相手にシベリア出兵中であり、ソ連は受け入れなかった。そこで、ロシア人社会のある東清鉄道のこの街が、選ばれたのである。まずはセミヨノブナというロシア人の家庭に寄宿し、徹底して実用語としてのロシア語を学んだ。その翌年には市内馬家溝に、後藤新平が創設した日露協会学校（後のハルピン学院）に特修生として入学した。そこでさらに、ロシア語に磨きをかけた。ハルピンは1901年、ロシアがシベ

リア鉄道の短絡線として東清鉄道を中国領内に引いた時その中継点となり、彼らが計画的に造り上げた都会だった。スンガリー（松花江）の流れの南に街は広がっていた。千畝が赴いたこの時期、混乱するソ連を逃れて多くのロシア人がこの街に流入していた。その中にはポグロム(※3)を恐れて亡命してきたユダヤ人もいた。

2004年8月後半、中国東北部へ初めて旅する機会があった。戦前、満州国の首都として日本が新京と呼んだ吉林省の都長春から、長距離バスに乗り、まだ完成間もない東北部を縦貫する高速道路を北上した。午後遅くの便だったのでハルピン入りは夜遅くになった。ロシアの雰囲気が残る町と言われていたので、宿泊はできればロシア人の経営していたホテルをと思っていた。駅近くのバスターミナルからタクシーに乗り換え、向かったのはその昔キタイスカヤ街と呼ばれていた繁華街の中央大街だった。その中ほどに、モデルン・ホテル(馬迭爾賓館)があった。



写真8 キタイスカヤ側から見たモデルンH

ホテルのロビーには、1932年当時、国際連盟によってここ満州に派遣されたリットン調査団の団長、英国人のV.A.リットンの肖像画が掲げてあった。すでに日本の関東軍に占領されていたハルピンで、リットンはこのホテルに滞在して日本の侵略戦争の筋書きを調べていた。その隣に当時のホテル経営者

ヨーゼフ＝カスペの肖像画も並んでいた。カスペもまたユダヤ系ロシア人で、この町の名士とって良い人物だった。当時、この街は中国の人々も惹きつけ、モンゴル・朝鮮・漢・満の民族が流入していた。その意味で、とてもコスモポリタンな雰囲気をもっていた。

千畝はここで臆することなく、ロシア人社会に溶け込んでいく。また日本総領事館で働き始めた後、その才能を見込まれハルピン学院でロシア語を教えもした。ある学院の後輩は、総領事館に出入りしていた時会議が行われており、中でロシア人が口角泡を飛ばして激論しているので誰かと気を付けていると、出てきたその一人が千畝なのでびっくりしたと語っている。

ある晩、千畝はロシア人の酒場に入った。そこで働いていた女性と話すうちに親しくなった。クラウディア＝アポロノフという旧家の出で、革命で国を追われ困窮していた一家は、慣れぬ仕事を彼女に負わせていた。かつては深窓の令嬢として暮らしていたクラウディアが、今は店の女給をしている。千畝は深く同情し、クラウディアを愛するようになった。1924年12月、二人は結ばれた。そして彼女の一家も領事館に付属する広い官舎に引き取り、同居させたという。クラウディアはキリスト教徒として、近くの正教会の御堂に通っていた。そして彼女を理解しようとする千畝も間もなく受洗した。彼の洗礼名はセルゲイ＝パブロビッチだったと言う。

それからの十年間、外交官としての千畝の仕事は、前半、謎に包まれている。末尾に掲げた幾つかの参照文献には、杉原の履歴が年表として載せてある。しかしいずれの書も20年代の後半は、その足跡が殆ど白紙である。その中で1927年11月、杉原による『ソヴィエト連邦国民経済大観』という研究書が日本外務省の手で発刊されている。そのソ連

研究を高く評価されての出版化だった。杉原はソ連の動静を伺うため、他人に成りすましソ連に入国していたかもしれない。そんな推定もあながち虚とは言えない立場にいたようだ。後半は、同じ岐阜出身の在ハルピン総領事、大橋忠一が満州国に転じた後を追って、同国外交部の職言わば植民地官僚となって、北満鉄道と改称した東清鉄道をソ連と交渉して買収する仕事に尽力した。ソ連保有の車両数などを正確に割り出し、交渉を有利な形で決着させたのも千畝の力、その情報収集力とロシア語の対話能力があったからだ。買収額は、当初の6億1千万を値切り1億4千万円まで下げさせたのだと言う。

その千畝が35年7月、突然満州国の官吏を辞め帰国し、外務省に復帰する。何があったのか。外交官として、陸軍が牛耳る満州国に不満があったからと言われている。しかし、その年末にクラウディアとの離婚が成立している。杉原はクラウディア思いで、例の空白の20年代後半、日本の長崎・雲仙のことなのか、リウマチを患う彼女を温泉で療養させるため帰国させて欲しいと外務省に願い出ている。ハルピンでの杉原邸では人の出入も多く、彼女は良きホステス役をこなしていたという。杉原を追った『千畝』の著者、ユダヤ系米国人のヒレル＝レヴィンは、晩年のクラウディアをオーストラリアのシドニー近郊のホスピスに探し出し、93歳になった彼女のインタビューに成功している。それによると、クラウディアにとって千畝はいつでも優しく妻思いの夫だったという。しかし、彼女は最後まで子どもをつくることをためらった。千畝は他に男がいると疑い、関係は破綻した。クラウディアは、何故子どもを？の問いに、「私も子供を欲しかった。しかしそれ以上に子どもを生み育てる苦勞を知っていた」と語ったという。革命の最中、一家

はボルシェビキの迫害を避けシベリアを越えて、逃れて来た。彼女の父は白系ロシア軍に身を投じてもいた。道すがら流産する女も見ただろう。クラウディアは、その悲惨な体験がトラウマにでもなっていたのだろうか。

ソ連の入国拒否に会う

日本の外務省に復帰した杉原は、36年4月7日、カムチャッカのペトロパブロフスクへの出張を命じられたその日に、知り合いの妹だった菊地幸子と再婚している。こうしてある意味での人生のやり直しが始まった。その年のうちに、長男弘樹が誕生している。そしてその年の暮れ、モスクワの日本大使館への赴任が決まった。ところが、明けて37年2月、ソ連側は外交官杉原千畝の大使館二等通訳官のアグレマン（承認）を拒否した。日ソ間においては、これまでにない極めて異例な事態であった。杉原は、ソ連側にとって手強い相手と思われたのだろう。北満鉄道の買収交渉での敏腕ぶりに脅威を感じてしまったのではないか。当時の外務省随一のソ連問題専門家だった千畝にとって、それは皮肉な出来事だった。

その年8月、杉原一家は幸子の妹節子を伴って太平洋を渡った。行く先はアメリカ大陸を越えて遠く、北欧のフィンランドだった。千畝はヘルシンキにある日本公使館の二等通訳官として赴任することになったのだ。ソ連からの入国拒否は痛手だった。しかしソ連に隣接するフィンランドは、その情勢を注視するのに格好の場所で次善の策としてこの地への赴任が決まったのである。幸子は、初めての外交官夫人としての優雅な生活を好奇の目で見ながら楽しんだ。

ヘルシンキでの勤務は39年の初夏まで二年近く続いた。その間、パリの在フランス大使杉村太郎氏からは、杉原の名前を伏せて大

使館員として招きたいという要請があった。この時は杉原本人ではなく、外相の広田弘毅が直接断っている。戦後A級戦犯として責任をとらされた広田は、杉原を高く評価していたという。杉原も長男弘樹の一字を広田の名からもらったのだと言う。

そして39年8月、突然リトアニアに領事館を開設するという転勤の辞令が杉原に降りた。ラトビアのリーガにあった公使館の出先として、開設するための人事だった。

日本にやって来たユダヤ人

さて話しを再び「リトアニア事件」の舞台へと戻そう。ヴァルハフティクラ、ヴィザを取得したユダヤ系ポーランド人は、はたして日本へとたどり着くことができたのだろうか。そのヴァルハフティクは難民移送の組織者だったため、ヴィザをもらった人々が続々とモスクワ経由でシベリア鉄道を東へと旅立つのを、なおしばらくは見守っていた。しかし、彼の身にソ連内務人民部（NKVD=後々のKGB）の追求が迫ってきた時、未だ脱出できぬ人々を置いて国際列車に飛び乗らねばならなかった。40年9月末のことである。NKVDの要員が彼を家に訪ねてきたと家主から聞き、安全のために家には入らず、家族には荷物をまとめてヴィルニユスで落ち合おうと電報を打ち、そこで妻子だけでなく仲間とも再開し、モスクワ行きの国際列車に乗ったのである。 写真9 ウラヂェイヴノストク駅舎



ソ連通過には約 2 週間の猶予が与えられていた。モスクワでは都心の快適なホテルに宿泊することができた。ヴァルハフティクがソ連官憲による摘発を恐れて外出せずじっとしていたのは、言うまでもない。そこからウラディヴォストク（以下ウラジオと略）までは、10 日を要した。車両は手入れが行き届き、コンパートメントでくつろぐことができた。ウラジオに到着後なお数日ホテルでの滞在となった。10 月 16 日、一行はついにウラディヴォストク港を離れ、日本の「北日本海運」の船で福井県の敦賀へと向かった。二日間の船旅だった。そうしてたどり着いた敦賀は、一行の目には今まで見たこともない珍しい極東の地と写ったようだ。



写真 10 旧敦賀港駅舎（移転・復元）

しかし、ここまで来て一度は追い返されたあるユダヤ難民は、「ツルガの町が天国に見えた」とも言う。杉原の通過ヴィザしかもため難民が、上陸を拒否されるという事件が起きたのだ。41 年 3 月、日本海の荒波を越えてウラジオから天草丸が敦賀へ入港した。しかし、乗船していた 72 人は通過ヴィザのみで、問題になっていたキュラソー・ヴィザさえ持っていなかった。「必要なヴィザは日本で取ります」という抗弁も空しく、下船は許されず再びウラジオへ向かう船に乗り続けねばならなかった。彼らはまさに「ディアスポラ（離散・流浪）」の民となったのである。

この間、日本で難民救済に当たっていたの

は、アメリカに本部のある合同配分協会（通称ジョイント）やユダヤ世界会議などの機関と、それらと連絡を取り合っていた神戸のユダヤ人協会だった。日本についてからのヴァルハフティクの活躍の場も、そこにあった。彼らに日本入国の目途もないまま、再び天草丸はウラジオの岸壁を離れた。そして再度の敦賀入港。待ち構えていたのは、前回岸壁越しに話したユダヤ人協会のメンバーだった。「上陸できるみたいだぞ」という言葉に耳を疑った。協会が駐日オランダ大使館と交渉して、キュラソー・ヴィザを発行してくれたのだった。現在米国のニューヨークで暮らす、ベンジャミン＝フィショフの証言である。

神戸には三十数家族のユダヤ人コミュニティがあり、その多くはロシア革命での混乱を逃れてハルピンに渡ったと同じアシュケナージだった。日本に渡ってきた難民は、40 年にはドイツ国籍のユダヤ人も多かった。しかし 41 年になると杉原ヴィザでやって来たポーランド系がそれに代わった。彼らの多くはこのユダヤ人社会に迎えられ、今も洋館が建つ北野町や山本通りに家を共同で借りて暮らすことになった。日本社会にも国を追われた彼らに同情し、支援を惜しまぬ人々がいた。その一つがユダヤ教と相通じるキリスト教の団体、日本ホーリネス教団だった。

ホーリネス系の教会は欧州のキリスト教会に根強くあった反ユダヤ主義とは無縁で、むしろユダヤ人のシオニズム(※4)に理解を示していた。救援の中心となったのは、尼崎教会の牧師、瀬戸四郎である。彼は神戸にいた同じくホーリネスの牧師斉藤源八とともに、神戸で難民に食料を援助したり、時には敦賀に向いて船賃が払えぬまま上陸できない難民にその運賃を立て替えてやったりした。教団としての支援も続き、難民の日本での慣れない生活にいろいろと世話を焼

いた。日本でも時代は軍国主義へと向かい、天皇を神格化する国家体制とキリスト教は共存が難しくなる時期だった。その中でホーリネス教団は、教団組織を解散させられるほどの弾圧を受けることになる。その原因の一つが外国人への支援で、特高などに絶えず監視されていたという。ユダヤ難民の支援は、思わぬ災いを教団に与えることになった。

ユダヤ人を助けた人の中で異色なのは、小辻節三だろう。彼は元々京都下賀茂神社の禰宜の家に生まれ、ミッションスクールに通ったことからキリスト教に出会い、アメリカ留学後さらにその究極としてのユダヤ教にひかれていった。戦後大分後になってからだが、アブラハムという洗礼名をもつユダヤ教徒になった人だ。彼は当時のユダヤ難民から「命の恩人」と慕われた。鎌倉在住の彼が手がけた難民支援は、対政府との交渉だった。滞在10日とされていた通過ヴィザの要件を大幅に延長するはたらきかけを行なった。小辻にはユダヤ問題の専門家として満州に招かれた経歴があった。当時の満鉄総裁、松岡洋右の顧問として活動したのである。小辻は外相になった松岡との人脈を利用して滞在延長に便宜を図った。おかげで多くの難民が不法滞在を免れたという。日本に逃れたヴァルハフティクも滞日8ヶ月に及び、その間極東のもう一つのユダヤ人コミュニティーがある上海を往復したりしている。



写真11 上海の旧ユダヤ人街(2016年春)

ヴァルハフティクは日本に来てからもリ

トアニアに留め置かれたユダヤ人を救出するため奔走した。彼らを大挙脱出させ、最終的にはイスラエルの地に送るには、もはや日本経由のルートしかないと考えていた。移送計画には戦争が迫り旅客が激減して困っていた「日本郵船」が、乗る気になった。しかし、横浜に拠点のあったジョイントが結局十分な資金を出さず、この計画は道半ばで終わった。当のヴァルハフティクは家族と共に41年6月、今横浜港に係留してある「氷川丸」でヴァンクーヴァーに向かった。行き先が決まらず日本に最後まで残ったユダヤ難民は、太平洋戦争の勃発をきっかけに中国の上海に追われ、日本の敗戦まで待つことになる。

戦後の杉原千畝

1945年8月15日、杉原一家はルーマニアのブカレストで終戦を迎えた。進駐してきたソ連軍の指示で、ルーマニア軍が管理する捕虜収容所に速やかに移送された。それからの一年半、杉原の妻幸子にとっては夫をソ連軍にとられないか心配な日々が続いた。収容所を転々とした後、1947年4月に、ようやくウラジオから博多行きの船に乗り、日本へと帰国した。そして6月に外務省に呼ばれ、辞職勧告を受ける。当時外務省はその職員の三分の一を人員整理する必要があった。ノンキャリアの杉原もその対象とされたのだ。戦時中は公に問題視されることのなかった「リトアニア事件」についても、「杉原はユダヤ人から金をもらったからヴィザを発行したのだ」とか、根も葉もない中傷的になったりもした。杉原の失意は大きかったに違いない。

50歳近くになって、新たな職をさがし出發するのは容易でなかった。しかも、戦災復興の途上にある世にあってである。1950年、ようやく定職と言って良いPX(進駐軍のス

トア)での仕事に就いた。これも英語力あったのである。54年には、神田のニコライ堂構内に当時あったニコライ学院のロシア語教員に招かれている。その後も科学技術庁やNHK職員などを転々とした。1960年、還暦を迎えた千畝に、モスクワでの駐在員の話が舞い込んだ。すでに日ソの国交は回復し、貿易再開の動きがあった。5月、商社の「川上貿易」モスクワ事務所の長として赴任することになった。普通、「老いにむち打って」と創造しがちだが、千畝の場合はむしろロシア語を存分に使える環境を手に入れ、期待を胸に出かけたらしい。モスクワでの単身での赴任生活は、都心でのホテル生活で、75年まで続いた。

68年8月、たまたま杉原が帰国していた時、イスラエル大使館から電話があり、是非会いたいという人物から大使館に招かれることがあった。参事官のG.ニシュリと言う人物で、会うなり「覚えていますか」と聞く。彼は、あのリトアニアでのユダヤ難民として杉原に直談判した5人の代表の一人だったと言う。「戦後、ずーっとあなたを捜していた」と言われた。それは感動的な再開だった。忘れかけていたあのリトアニアでの、40年夏の出来事が急に記憶の底からよみがえって来た。こうして国際的には「杉原復権」が開始された。69年には、イスラエルの宗教大臣となったゾラフ=ヴァルハフティクとも再開し、同国政府から勲章も授与された。

さらに85年、イスラエル政府は「諸国民の中の正義の人賞(ヤド・バシエム賞)」を杉原に与えたが、この時は持病を抱えていた杉原に代わり、幸子夫人がはるばるイスラエル入りし、授与式とレバノン杉の記念植樹に参加している。それからまもなく、86年の7月31日に、杉原は戦後居を構えていた神奈川県藤沢市の自邸で永眠した。そして日本

国内での彼の復権は、ようやく1991年になって、日本政府の当時の外務大臣、河野洋平氏の名によって行われたのだった。

杉原はなぜヴィザを発給したのか

先に私は、杉原は人道上の理由からヴィザを発給したと述べた。この問いへの答えは、これで十分なのかもしれない。しかし、杉原がなぜ危険とその後の予想される困難を省みずこれを実行したのかには、当然その背景があった。それには、まだ答えていないと思う。これまで、述べた杉原の生い立ちと経歴がそのヒントを提供している。

写真12 カウナスの杉原千畝



私はやはりハルピンでの経験が、その伏線の重要な部分を担っていると思う。当時の日本人には、そもそも外国人に接すること自体希なことだったはずだ。ところが杉原は留学によって多感な青春時代をこのハルピンで過ごした。しかも、後に日本の帝国主義者が「五族協和」を呼びかけるきっかけになったほど、このコスモポリスは異質なものを受け入れる余地があった。中国の中にあってその

政府の支配は限定的で、一方で旧ロシアの遺産が数多く残っていた。杉原自らその買収に当たった旧東清鉄道などは、そのためのロシア人社員を多く抱えていた。そして帝国日本の存在も、日を追う毎にこの地で増大していった。戦争や革命に翻弄される難民を目の当たりにしたのも、この街でだった。シベリアを越えて多くの白系ロシア人が流入していた。しかも、杉原の妻となったクラウディア自身がその難民の一人だった。こうした人々に直面した時、杉原個人は当時の日本人としては珍しいほど、「普遍的」な指向をもって

いたと思う。この普遍的の意味は、「誰とも隔てなく」ということであり、その反対が「個別的」である。この個別的というのは、「特定の人（仲間）とだけ親しく」であり、その仲間と認知されない人々を排除する傾向がある。杉原の普遍的指向は、おそらく本人に内在するものだったと思う。杉原は元来、異質なものを排除するどころかそうしたものに興味を覚え、外国語を学び異国へとやって来た。ハルピンでは、日本人と交わるよりロシア人という時の方が居心地がよさそうだった、との後輩の話も残っている。こうした性格の人物があつたリトアニアで詰め掛けたユダヤ難民を前にどういう態度に出るかは、おそらくかなりの選択の幅がありえたのだろう。普通の官僚的態様の限界を越えることも十分にあり得たのだ。

杉原はクラウディアとの結婚を機にロシア正教のキリスト教徒となった。キリスト教もまたその普遍的性格をもっている。この絶対神を祭る教えは、その神の前に信ずる者が皆平等であつて、キリストは分け隔てなく人を愛されたという教えに則っている。当然このこともヴィザ発給の動機になつただろう。事実、幸子は当時を振り返って、杉原が「私を頼ってくる人々を見捨てるわけには行か



写真13 神田のニコライ堂

ない。でなければ私は神に背く」と語つたと言っている。自身もキリスト教徒となつた幸子は、「神に背くのは、ひいては人道にもとるということであり、『神は愛であり、愛は神である』と聖書にあります」とも語っている。しかし、杉原の正教徒（日本でいうハリストス正教）としての経歴は定かでない。日本に帰国してからモスクワ赴任までの13年間、ハリストス正教会の会員として信仰生活を送つたとは確認できなかった。神田ニコライ堂（東京復活大聖堂）の信徒であつた可能性が高い。そのニコライ堂で応対してくれた長司祭のイオシフ=大窪望師は、多分この会堂に来ていたのでしょう。しかし、その当時のことを記憶している長老がいるかどうか分かりません。との答えだつた。

杉原の葬儀は神道形式だつたとも言うし、幸子も敬虔な信者とは言えなかつたと語っている。杉原がロシア正教徒だつたからという推定は、根拠として十分でない。むしろ自分の出自にとらわれず普遍的志向の強かつた杉原だから、キリスト教にも近づけたしヴィザ発行という英断も下せたのではと思う。そして発行にいたる経緯には、当時の時代状況やその他様々な要因が複雑に絡み合つていたのでと想像される。ポーランド人スパイにヴィザ発行の便宜供与を行つていたこ

とも、結果としてユダヤ系ポーランド人を助けるきっかけを提供したと言ってよい。また杉原のかつてのフィールドだった満州国には、その開発資金を補うためユダヤ人とその資本を受け入れようとする動きがあった。外務省の見解が杓子定規でも、ユダヤ人へのヴィザ発行をとがめるまでには至らないだろうと楽観していた節もある。彼の行動には、その意味で内発的な確かな動機もあれば、外的規制の中で許されることはやっても良いのではという、あいまいな見通しも存在していたように思われる。

難民たちはその杉原の見通しで助かった。ウラジオや敦賀に着いた時、ソ連も日本も彼らを今更、リトアニアには送り返せなかった。結果オーライとなったのである。

おわりに

ここ数年、私が追っていたのは東西統一後のドイツ、特に1992年夏に滞在したライプツィヒ市を含むドイツ東部での復興がどう進んだかというテーマだった。これを検証するため、2002年には十年の時を経てドイツ東部を訪ねようとしたが、その年の夏に襲ったエルベ河の洪水に阻まれ、ドイツ行きは翌年となった。その2003年夏、ドイツ東部で見聞したものは、ザクセンの都ドレスデンでのフォルクス・ワーゲン社の未来的な工場やライプツィヒ郊外の超近代的なメッセ（見本市）の建物群だけでなく、一向に改善されない失業率やそれにとまなう若者が流出した地方都市の閑散とした表情など、むしろ復興が進んでいない病めるドイツ東部の姿だった。ドイツ復興の明るい展望を期待していた私には、残念な現実が立ちはだかった感があった。

それに比べて滞在前半、英国から入境したベルリン市では、第二次大戦中のナチス抵抗

運動を担いその暴力の犠牲になった神学者、D.ボンヘーファーの名を冠したホテルに泊まる経験をした。また市の西郊ヴァンゼー地区にあるナチスがユダヤ人の最終的解決（絶滅政策）を決定したと言われる館を訪れたりした。そう、大戦期におけるユダヤ人へのホロコーストは、私が数年どころかもっと長い時間のスパンで追っていたテーマだった。1985年の夏、ポーランドを初めて訪問した時には、オシヴィエンチムを訪れている。ドイツ語名アウシュヴィッツで知られる絶滅収容所の跡だ。ユダヤ人という曖昧な民族概念（ユダヤ教徒なのか。非アリア系の容貌の有無なのか）によって差別され、彼らを憎むヒトラーに駆り立てられたナチスの餌食になった人々。この収容所でシャワー室だと言われた部屋に入り、ツィクロンBの毒ガスを浴びて絶命していった人々。その骸を同じユダヤの同朋の手によって隣の火葬室に運ばれ、煙と灰にされていった人々……。92年には、同様にドイツ東南部の文化都市、ヴァイマルの北郊にあるブーヘンヴァルトの収容所にも足を運んだ。国家と戦争の犠牲になってこうした不条理な死を遂げなければならなかった人々のその運命には、深い同情を禁じえなかった。



写真14 ソフィー＝シヨル

あの大戦の最中、こうした暴虐に対し正面

からナチスを批判したり、陰でユダヤ人救出に力を貸した人たちもいた。今、東京で公開されている『白バラの祈り』という映画の主人公、ミュンヘンにいたゾフィー=ショルもそうだった。また、冒頭で紹介したオスカー=シンドラもその一人である。しかし彼女彼らのような存在が、稀だったこともまた然りである。杉原千畝氏は、彼らと同じように顕彰すべき人の一人であることは間違いない。私はその人間としての魅力に引き寄せられていった。まことに興味尽きない人物である。そうして、このテーマで今回の原稿を書くに至ったしだいである。

杉原を調べる私の探求には、幾つもの偶然があった。リトアニアについては、大学院で知りあった R.アレクザンダーがユダヤ系リトアニア人の両親をもつと聞いていた。ちなみに、名作映画『炎のランナー』の主演の一人、短距離選手のハロルド=エイブラムスも父が同じくユダヤ系リトアニア人だったと語る場面がある。私が大学で最初に受けた授業は、もう名前も分からないが、イエズス会士の神父による宗教音楽論だった。この人が最初に会ったリトアニア人で、自分の国のことをニワトリの反対だと言って笑わせたのを今でもよく覚えている。おそらくヴィルニウス大学で学んだのだろう。遠い異国とは言え、私にもまたここ至る伏線があったようにも思う。

私にとって急に身近になった中国・ハルピン。杉原が学び教えた旧ハルピン学院の同窓会は今も残っていた。その事務局長の麻田平蔵氏と会うことができたが、彼はアルバム業者の「恵雅堂出版」社長だった。ロシア歌曲の合唱団を主宰し本人もロシア語を学んだ人と聞いていたが、それがハルピン学院だとは思わなかった。さらに、晩年の杉原氏を取材したフジテレビ初代モスクワ特派員、萱場

(かやば)道之輔氏は、私が初めて海外に出かけた時、モスクワからフィンランドのヘルシンキ行きの夜行寝台列車で隣り合わせた人物だった。それが、今回直に取材した時に確認できた・・・。



写真 15 西から見たナホトカ港

杉原を通して 1930,40 年代という、現代史で最も重要な時代の様相を自分なりに調べ上げることが出来た。彼の生涯と活躍した時代が生きた世界史の舞台だったようにも思う。そしてユーラシア大陸の東と西を結ぶシベリア鉄道がこれらを結んでいた。この列車に革命を逃れた白系ロシア人が乗っていた。その中に杉原の妻クラウディアもいた。後にヴァルハフティクらユダヤ系ポーランド人の難民もこれを利用した。そして戦争が終わった時、他ならぬ杉原一家もこの列車に揺られて、帰国の途についた。そして私もまた初めての海外旅行で、杉原一家が最後に収容されていたナホトカの、その駅からハバロフスクまでこれに乗り、その後もイルクーツクとモスクワ間でシベリア横断を試みる機会があった。旅を人生の一部にして来たつもの私自身の経験に、繋がるものが、今回のテーマには本当に多かった。

そんな感慨を抱きながら、この辺でワープロを打ち終わることにする。 <了>

<脚注>

- ※1 イディッシュ語とは、中東欧のユダヤ人がこの時まで使っていたドイツ語に近い言語である。ただし表記はヘブライの文字を使い、右から左に横書きする。
- ※2 アシュケナージとセファラディーとは、ユダヤ人に何系統かあり、セファラディーはスペインを祖とする南欧系で、アシュケナージはドイツ及びポーランドを祖とする北欧系である。
- ※3 ポグロムとはユダヤ人への偏見から、彼らを集団として虐殺すること。それが大規模化するとホロコーストとなる。
- ※4 シオニズムとは、ユダヤ人は追われた国であるパレスティナに戻るべきだという政治運動。
- ※5 ラビ(英語ではラバイ)とは、ユダヤ教の祭司であり、導師でもある。

<参考文献>

- 1 『物語バルト三国の歴史』 志摩園子 著 中公新書 2004年 中央公論社
- 2 『地球の歩き方—バルトの国々—』 地球の歩き方 編集室 編 2005年 ダイアモンド社
- 3 『六千人の命のビザ』 杉原幸子 著 1990年 朝日ソノラマ社
- 4 『真相・杉原ビザ』 渡辺勝正 著 2000年 太平出版
- 5 『千畝』 ヒレル＝レビン 著 諏訪澄・篠輝久 監訳 1999年 清水書院
- 6 "In Search of Sugihara" written by Hillel Levin 1996 The Free Press, New York
- 7 『日本にきたユダヤ難民』 ゴラフ＝バルハフティク 著 滝川義人 訳 1992年 原書房
- 8 『ハルピン学院と満州国』 芳地隆之 著 新潮選書 2005年 新潮社
- 9 「杉原ビザとリトアニアのユダヤ人の悲劇」 野村真理 著
『世界史の研究』 2005年2月号 山川出版社
- 10 『ホロコースト前夜の脱出/杉原千畝の命のビザ』 下山二郎 著 1999年 国書刊行会
- 11 『自由への逃走—杉原ビザとユダヤ人—』 中日新聞社会部編 1995年 東京新聞出版局
- 12 『南京の真実』 ジョン＝ラーベ著 E＝ヴィッケルト編 平野卿子 訳 1997年 講談社
- 13 『日本人はなぜユダヤ人を迫害しなかったのか』 ハイנטツ＝マウル著 黒川剛 訳
2004年 芙蓉書房

以上